MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．６．２３　発行元
第 584 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

米澤穂信『冬期限定ボンボンショコラ事件』

４月に創元推理文庫から米澤穂信の『冬期限定ボンボンショコラ事件』が出た。『秋期』が出てから１５年。長い間待ち続けた『小市民シリーズ』の掉尾を飾る作品。期待を裏切らない米澤穂信らしい仕上がりになった。

米澤穂信『小市民』シリーズ
1．春期限定いちごタルト事件
2．夏期限定トロピカルパフェ事件
3．秋期限定栗きんとん事件
4．巴里マカロンの謎(短)
5．冬期限定ボンボンショコラ事件

小鳩君、交通事故にあう

私が米澤作品と最初に出会ったのは『春期限定いちごタルト事件』である。『古典部シリーズ』の『氷菓』はその次に読んだ。ということで、『小市民シリーズ』は懐かしい思いが強い。

今回、主人公の小鳩常悟朗君は高校三年生になり、小山内ゆきさんと学校帰りに堤防道路を歩く。そこへ車が突っ込んで来るのが見えたので、咄嗟に小山内さんを堤防下に転がしたけれども、自分は車に撥ねられてしまう。そこで意識を失い、次に気付いた時には病院のベッドで身動きできない状態に。

骨折の重傷で寝返りさえできない形で思考が開始される。つまりベッド・ディテクティブである。小山内さんの無事も確認できず、連絡を取ることができない…。

抜群の読みやすさ

米澤ミステリを読んでいると知らず知らずのうちに没頭してしまう。引き込まれるものがあるのだ。物語作りが上手なのは当然だが、設定がわかりやすいのである。日常の流れからスッと事件に入り込んでいく。抜群の読みやすさ。

小鳩君が思い出すのは三年前の中学校三年生の時の出来事。今回小鳩君が巻き込まれたほぼ同じ場所で同級生の日坂祥太郎君が車に撥ねられたのだった。その時、小鳩君は犯人を見つけようと動き回ったのだった。

その流れで小山内さんとの出会いが語られ、最初の探偵活動がスタートしたのだった。

車はどこに消えたのか…

最大の謎になっているのは、事故の起きた堤防道路は一本道で、車は９km を直進し続けなければならないということ。抜け道がないので、先にあるコンビニの防犯カメラの映像に必ず車が写るはず。でもカメラに車は写っていなかった。では事故車は何処へ行ったのか？　中学生当時の調査は続く。

事故にあった日坂君とはその後連絡がとれなくなり、噂では別の高校に進学してその後自殺したような話も伝わってきていた。

三年前の自分の調査が日坂君にどのような影響を与えたのかを振り返りながら、今回の事件のことを考える小鳩君。小山内さんからは毎日のようにメッセージカードが届けられるようになる。小山内さんが伝えようとしていることは何か？

今回の事故の結末は…

三年前の日坂君の事故は表面的には決着が付いているのだが、その裏に隠されている部分と、今回の事故との関連は…？　過去と現在が交互に描写され、二つの出来事が深く分析されていく。警察ではないので、手に入る証拠・証言はかぎられているけれども、自分たちが探りえる手掛かりを追求していくと…。少ない登場人物の中で結末の意外性を上手に作り上げている。

この『小市民シリーズ』。続編は作られないのだろうか？

知念実希人『絶対零度のテロル　天久鷹央の事件カルテ』

４月に実業之日本社文庫から出た本。『天久鷹央シリーズ』の何作目になるのだろうか。途中で出版元が変わったので単純に計算できなくなった。調べてみると１６冊目のようだ。今回は長編になっている。いつもだと病院の患者に関わって病気と結び付く展開が多いのだが、本書は外部で起きた事件の遺体の検案が発端になっている。

熱帯夜の夜。小鳥遊優と鴻ノ池舞が病院の当直の日。救急外来に心肺停止患者が運び込まれる。熱中症かと思っていたのに、患者のからだは冷えきっており、凍死状態であることが判明した。異常死なので警察に連絡を入れると、やってきた刑事は犯罪の可能性は低いと言い、事件性なしと判断した。小鳥遊が司法解剖を主張したのだが聞き入れられず、身元不明のまま市役所に引き取られることに…。次の日、経緯を聞いた鷹央が独自に身許の調査に取り掛かる。僅かに残されていた手掛かりを辿っていくと…。やがて、同じような事件があることが判明して、警察も本腰を入れて捜査を始める。最初はホームレスの行き倒れのように見えた遺体も、裏に隠された大がかりな背景が見えてくるようになり、公安も巻き込んでの大事件に発展していく。ポイントは、外傷はなく、低体温で死亡するということ。スタート時には巨大な冷凍施設などを捜していくのだが、どうもその方向性は正しくないようなのだ。鷹央の推理は真実を見抜くことができるのだろうか。